

第6回講義 (20141114)

第1章 問答の観点からの言語行為論

§1 発語内行為の分類

§2 質問の発語内行為の特殊性

§3 言語行為はなぜ成立するのか? (言語行為は、問答の中で成立することを論証したかったのですが、未完です。)

第2章 質問以外の言明は、問いに対する答として成立することの証明 (焦点論からの証明)

コリングウッド・テーゼの証明 (焦点論からの証明)

1 コリングウッド・テーゼの説明

CT「(質問以外の)すべての言明は、それが答えとなる質問(相関質問)への関係においてのみ意味を持つ」

2 「焦点」の観点からのCTの証明

テーゼ1「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」

テーゼ2「焦点の位置は、質問と答えの間の関係によって決定される」

- (1) 焦点とは何か
- (2) 「焦点」と他の類似の概念との違い
- (3) テーゼ1の証明
- (4) テーゼ2の証明
 - (a) テーゼ2の証明1
 - (b) テーゼ2の証明2

先週の講義内容への補足

■テーゼ1の証明についての補足

テーゼ1「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」は、もし焦点が異なるときに発話の真理条件がことなることを示せたらならば、言えるだろう。

Mats Rooth は 'Theory of Focus Interpretation' in Natural Language Semantics, 1992, Vol. 1, pp 75-116 において、焦点の違いが真理条件の違いになるケースをあることを示している。それは、次の例のようにその分において only が用いられる場合である。

①Mary only introduced Bill to Sue.

②Mary only introduced Bill to Sue.

ここで、Mary が Bill と Tom を Sue に紹介し、その他の紹介はなかったとという状況を仮定しよう。Rooth によれば、このとき①は偽となり②は真となる。①は、Mary が Sue に紹介したのは Bill だけであることを意味するからであり、②は Mary が Bill を紹介したのが Sue だけであることを意味するからである。only が何と結合するのかが、焦点に依存する場合、焦点の違いが真理条件の違いをもたらす。only でなく even であれば、焦点の違いは真理条件の違いをもたらさない、と Rooth は指摘している。

これから、焦点の位置の違いが真理条件の違いをもたらす発話があるといえるが、しかしすべての発話について、それが言えることにはならない。したがって、これからテーゼ1を証明することはできない。

■テーゼ2の証明については、先週示したよりより明確に証明できることがわかった。

テーゼ2「焦点の位置は、相関質問によってのみ決定する」の証明

この証明は、次の二つのテーゼの証明によって可能になる。

テーゼ2 a 「相関質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する」

テーゼ2 b 「発話の焦点位置が決定すれば、相関質問が与えられる」

この二つから「発話の焦点位置が決定するのは、相関質問が与えられる時そのときに限る」が言える。これはテーゼ2と同じ内容である。

(a)テーゼ2 a 「相関質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する」の証明

私たちは、同一の文を異なる質問に対する答えとして使用することができる。答えの発話の焦点は、相関質問である補足疑問の疑問詞のところに代入された語句にある。従って、相関質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する。私たちはこれを次の例で示すことができる。

Q1: 誰が、昨日会議に来なかったのですか？

A1: 彼が、昨日会議に来ませんでした。。

Q2: 彼は、何時会議に来ませんでしたか？

A2: 彼は、昨日会議に来ませんでした。。

Q3: 彼は、昨日どこに来ませんでしたか？

A3: 彼は、昨日会議に来ませんでした。

Q4: 彼は、昨日会議に来ましたか？

A4: 彼は、昨日会議に来ませんでした。

(b)テーゼ2 b 「発話の焦点位置が決定すれば、相関質問が与えられる」の証明

焦点は、文のある構成要素のパラダイム関係に注目することである。＜文のシンタクスのある構成要素が焦点をもつとは、シンタクス上のその構成要素の値（内容）が、「他でもなく、〇〇である」ということに注目することである。したがって、その発話を答えとする質問は、その部分の値を問う補足疑問になる。従って、発話の焦点位置が決定すれば、焦点の置かれる語句を適切な疑問詞に置き換えれば（必要ならば語順を変えれば）相関質問が与えられる。

このテーゼ2 a と2 b からテーゼ2が帰結する。

以上が先週のテーゼ2の証明のやり直しである。

このようにテーゼ2の証明をやり直すと今度はテーゼ1の証明が曖昧で弱いように思われる。そこで、今回は、別の順序での証明を考えてみた。

3 「焦点」の観点からのCTの証明の再説（先週とは、全く異なる順序で証明をやり直す）

CTの証明を次の4つのテーゼの証明によっておこなう。

テーゼ1 「(質問を除く)すべての発話は焦点を持つ」

テーゼ2 「焦点の位置は、相関質問によってのみ決定する」（これは先週のテーゼ2と同じもの）

テーゼ1と2から、次のテーゼ3が帰結する。

テーゼ3 「すべての発話は、相関質問を持つ」

このテーゼ3と次のテーゼ4からCTが帰結する。

テーゼ4 「相関質問が異なる時、発話の意味は異なる」（これが先週のテーゼ1に対応するもの）

CT 「(質問を除く)すべての発話の意味は、相関質問によってのみ決定する」が帰結する。

(1) テーゼ1 「すべての発話は、焦点を持つ」の証明

「焦点」とは、発話の中でもっとも強調される部分である。発話する以上は、言いたいことがあり、強調したい部分があるのが通常だろう。ちなみに、一語文は、その強調したい部分（焦点）だけを発話したものである。

（ウィキペディアの項目「焦点（言語学）」には、「話題はすべての文にあるわけではないが、焦点はすべての文にあるとされる。」とある。ただしその証明はない。）

（2）テーゼ2「焦点の位置は、相関質問によってのみ決定する」の証明

この証明は、上記で示したとおりである。

（3）テーゼ1とテーゼ2から、テーゼ3「すべての発話は、相関質問をもつ」が帰結する。

このテーゼ3の証明には、焦点を利用しない方があろう。

（4）テーゼ4「相関質問が異なる時、発話の意味は異なる」の証明

このテーゼは、次のプロセスで証明できる。

- ①すべての言明は、問いへの答えとして理解できる（上記テーゼ3）。
- ②問いへの答はすべて、同一性発話として理解できる。（仮定。後で証明）
- ③すべての言明は、同一性発話として理解できる。（①と②より）
- ④同一の文は、異なる問いへの答となりうる。（上記テーゼ2の証明過程で指摘された）
- ⑤同一の文が、異なる問いへの答えである時、それは異なる同一性発話として理解できる。（②と④より）
- ⑥異なる同一性発話は、（異なる真理条件、主張可能性条件、使用法を持ち）異なる意味を持つ。（仮定。後で証明）
- ⑦相関質問が異なる時、発話の意味は異なる。（⑤と⑥より）

この②の証明を次の章で行いたい。

第3章 問答の同一指示テーゼ

（以下は、Yukio Irie, “Identity Sentences as Answers to Question” in *Philosophia Osaka*, Nr. 7, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 2012/3, pp. 79-94. (OUKA に掲載) の日本ヴァージョン(未発表)から多くを引用)

1, 「問いへの答はすべて、同一性発話（ないし非同一性発話）として理解できる」の証明

まず基本的なアイデアを示しておきたい。

「問いは指示を求めており、答えは、問いとの繰り返しを避けたその最も短い形式を考察するならば、問いが求めている対象の指示を与えている。したがって簡潔な言い方をするならば、問いと答えは同一性の関係にある。」

これを「問答の同一指示テーゼ」と呼びたい。これから帰結することは、問への答えを完全な形で表現すれば、同一性発話になるということである。これが成り立つならば、同一性発話についての適切な意味論を得たならば、それによって、すべての発話について適切な意味論を得たことになるだろう。

以下では、疑問文の発話を「疑問発話」とよび、補足疑問文と決定疑問文の発話をそれぞれ「補足疑問発話」と「決定疑問発話」と呼ぶことにしたい。この二種類の疑問文について、次のT1aとT1bを証明したい。

T1a「補足疑問にたいする答えは、完全な形で表現されると、同一性文に書き換え可能である」

T1b「決定疑問に対する答は、完全な形で表現されると、常に同一性文ないしその否定に書き換え可能である。」

2 補足疑問発話に関するT1aの証明

(1) 全ての補足疑問発話は指示を求めている。

補足疑問発話は、答えを求めている。答えとは、補足疑問文の疑問詞にある表現を代入して、(必要に応じて位置を変えて)平叙文としたものである。しかし、多くの場合、我々はそのような答え方をせず、疑問詞に代入することになる表現だけを発語して答える。つまり、完全な平叙文ではなくて、その部分だけを発語する。なぜなら、その部分こそが問う者が求めている新情報であり、その他の部分は、すでに補足疑問発話によって与えられている旧情報だからである。

補足疑問は、他者に尋ねるときと、自問するとき用いられるが、どちらにせよ、補足疑問発話を理解するとは、どのような対象が求められているのかを理解することである。他者に尋ねるときは、他者に対象の指示を求めている。これへの返答を他者に伝えるときには、他者に対象を指示している。あるいは他者が対象を見出すための手がかりを与えようとしている。自問するときの補足疑問発話は自分で対象を探求しており、これへの返答を自分で見出すときには、対象を見つけている。

補足疑問文の疑問詞を除いた部分は、フレーゲのいう述語の不飽和によく似た性質をもっており、それを飽和させるために指示を求めている。違いは、述語はそれだけでは完全な文となることがないのに対して、補足疑問文の疑問詞を除いた部分は、それだけでも完全な文となることが可能な場合があるということである。例えば、「あなたは何を買いましたか」の「何を」の部分のをのぞいて、「あなたは買いました」とすると、目的語が欠けており、完全な文とはならない。しかし、例えば、「あなたが、その本を買ったのはいつですか」の場合には、「いつ」の部分を除いて、「あなたは、その本を買った」としても文としては完全である。

(2) 問い求められるものの記述句と答えは、同一対象についての異なる表現である。

補足疑問を問われた者が、返答できるためには、補足疑問は返答者がどの対象を指示すべきかを指示しているはずである。なぜなら、そうでなければ、返答することが出来ないからである。つまり、補足疑問は対象の指示を求めているのだが、しかしその対象を返答とは異なる他の仕方ですでに指示している。つまり、補足疑問と返答は、異なる仕方ですべて同一対象を指示している。次の例で確認しよう。

「世界で最も速く走る人はだれですか」「ボルトです」

「あなたはどこの出身ですか」「ヨーグルトで有名な国です」

「あの地震が起きたのはいつでしたか」「10年前の明日です」

これらの補足疑問と返答は同一の対象の異なる指示を与えており、それは次の同一性文によって明示できる。

「世界で最も速く走る人＝ボルト」

「私(問いの受け手)の出身場所＝ヨーグルトで有名な国」

「あの地震が起きた時点＝10年前の明日」

補足疑問を発する者が通常意図していることは、彼が求めている対象を指示する別の表現を求めることではなく、求めている対象そのものに辿りつくことであろう。返答者がたまたま言葉で返答するとき、問うものが、その対象に辿りつくのを助けるための手がかりを言葉で与えているにすぎない。場合によっては、指さしなどの別の方法で答えることができるかもしれない。問う者の注意も答える者の注意も、言葉には向かっておらず対象に向かっている。しかし第三者から見れば、そこに生じていることは、同一性文を共同で作ることである。

(3) 答えの完全文と同一性文

上述のように補足疑問に対する答えは、多くの場合、問いの繰り返しを省いた最も短い形式において、対象の指示を与えている。例えば、次のようになる。

「昨夜は何を食べました?」「カレー」

このような省略された答えを補って、文法的にも情報内容としても完全な形で表現することができる。それを「答えの完全文」と呼ぶことにしよう。上記の例では、次のようになるだろう。

①「私は昨夜、カレーを食べました」

補足疑問に対する答えの完全文は、同一性文に書き換えることができる。上の例は、次のような同一性文に書き換えられる。

②「私が昨夜食べたもの＝カレー」

上記の①は、別の問いの答えにもなりうる。例えば次のようである。

「あなたがカレーを食べたのは、いつですか」

しかしこの問いに対する答えとしての①を同一性文にしたものは、②ではなく、次の③になる。

「私がカレーを食べた時＝昨夜」

この同一の文の二つの言明の違いは、焦点の違いになっている。焦点の部分強調するために「(他でもなく)」という表現を加えて、下線を引くと次のようになる。

①「私は昨夜、(他でもなく)カレーを食べました」

②「私は(他でもなく)昨夜、カレーを食べました」

この焦点の違いは、答えの完全文を同一性発話に書き換えた時に、さらに明瞭になる。

①「私が昨夜食べたもの＝カレー」

②「私が最後にカレーを食べた時＝昨夜」

①と②は同じ文であるが、別の問いへの答えの完全文であった。実際の答えは、文の発話、つまり言明である。文としては、同じ完全文であっても、問いが異なれば、言明としては異なる。それは焦点の違いであり、その焦点の違いをさらに明確に表現すれば、その完全文を同一性文に変換した時の、同一性文の違いとなる。ところで、ある問いに対するある答えの完全文は一つとは限らない。上記の例では、①も②も、「あなたは昨夜何を食べましたか」の答えの完全文である。私がここで、論証したいのは、すべての問いの答えの完全文は、すべて、上記のような同一性文に書き換えることができるということである。

(4) 主要な疑問詞についての証明

(a) 疑問詞「どれ」「だれ」を用いる問い

「あなたが好きな花は何ですか」「あなたが好きな花はどれですか」を比較してみよう。例えば、花屋の店先で質問するときには、「あなたが好きな花はどれですか」という質問することが多いだろう。そのとき、答える者は、その花屋に並んでいる花の中から選んで答えることを期待されている。花屋の店先で、「あなたが好きな花は何ですか」と質問することもできるが、その時には、質問する者は、花屋の店にある花に限定することなく、好きな花を教えてほしいと尋ねているのである。また答えるものが、花屋にない花を答えても問題ない。しかし、「あなたが好きな花はどれですか」という問いは、花屋の店先で質問したり、花の図鑑を見ながら質問したりするときに、使われるだろう。つまり、選択肢が与えられているときに、私たちは「どれ」という疑問詞を使った質問を使用するように思われる。「何」の質問の場合には、答えの選択肢は与えられてないと考えられる。

「あなたはどの花が好きですか」「あれです」

「私の好きな花＝あれ」

さて、「どれ」の質問がこのような質問であれば、答えは、想定された選択肢の中から選択される。

そして、答えの完全文は、同一性文にすることができる。

「誰」の質問の場合、選択肢が与えられている場合と、与えられてない場合がある。「クラスの中であなたが好きなのは誰ですか」の場合には、選択肢が与えられている。しかし「あなたが尊敬するのは誰ですか」という質問の場合には、選択肢の集合が与えられているわけではない。しかし、死んだ人を含めるとしても、あるいはフィクションの中の人物を含めるとしても、とにかく人間の中から選択することが期待されていることは間違いない。選択肢の集合は、カテゴリー条件によって、与えられていると言ってもよいかもしれない。いずれにせよ「誰」の質問は、一人ないし複数の人間を指示することを求めているので、その答えの完全文は次のように同一性文に書き換えるこ

とができる。

「あなたが尊敬するのは誰ですか」「ガンジーです」

「私が尊敬する人物＝ガンジー」

(b) 疑問詞「どこ」「いつ」を用いる問い

キャンプにゆく相談をしていて、「どこに行きたいですか」問われたときを考えてみよう。もしこの問いが、特定の場所を尋ねているのなら、答えは「大山です」というようなものになり、その完全文は「私が行きたいところ＝大山」という同一性文に書き換えられるだろう。

もし「どこに行きたいですか」と問われて、「涼しいところに行きたいです」と答えたのだとすると、答えたものは、その問いが特定の場所を答えなくてもよい問いだと考えたのである。その場合、その問いをより正確に表現するならば、「あなたはどんなところに行きたいですか」「あなたが行きたいところの特徴はなにですか」という問いになるだろう。そのときには、答えの完全文は、「私が行きたいところの特徴＝涼しいこと」のような同一性文になるだろう。（「どんな」の問いについては、後で取り上げる）

「いつ」の問いの場合には、たとえその答えが、曖昧になるとしても、答えの完全文を、同一性文に書き換えることができるだろう。

「いつになったら引越すの？」「子供が大きくなったとき」

「引越すとき＝子供が大きくなったとき」

(c) 疑問詞「どのようにして」(how)を用いる補足疑問

「あなたはどのようにして試験に合格したのですか？」「毎日10時間以上勉強したのです」

この答えの完全文は、次のようになる。

「私は毎日十時間以上勉強してその試験に合格しました」

これを、次のような同一性文に書き換えられるだろう。

「私が試験に合格したやり方＝毎日10時間以上勉強すること」

この左右の名詞句は、抽象的一般名だといえるだろう。

(d) 疑問詞「なぜ」を用いる補足疑問

「なぜ彼はそうしたのですか」「なぜならお金に困っていたからです」

この答を完全な文にすると次のようになるのだろうか。

「なぜなら彼は金に困っていたからです」

この文は、完全文ではないだろう。なぜなら、問から独立にそれだけを取り出しても意味が解らないからである。つまり、この文は、答えが陰伏的に提供しているすべての情報を提供していない。完全文は次のようになるだろう。

「彼がそうしたのは、彼がお金に困っていたからだ」

最後の答えは、次のように補うと同一性文となる。

「彼がそうした理由＝彼がお金に困っていたこと」

一般的に「なぜ」の問は、原因や理由や根拠を尋ねる問であるので、「原因は何か」「理由は何か」「根拠は何か」という問いに言い換えることができる。そして、その答えは「〇〇の原因＝・・・」のような同一性文に書き換えることができるだろう。その両辺は抽象的単称名であろう。

(e) 疑問詞「何」を用いる問い

「あなたの好きな花は何ですか」と問われて「バラです」と答えるとき、この答えの完全文「私の好きな花は、バラです」は、主語と述語を换位して「バラは、私の好きな花です」と言い換えられるので、同一性文である。しかし、「これは何ですか」と問われて、「それはリンゴです」と答える場合には、换位して「リンゴが、それです」と言い換えることはできない。これは主語述語文である。このようなケースをどう考えたらよいだろうか。

(i) 「何」の問いの曖昧性

「何」疑問に対する答えが、主語述語文になるのは、その「何」の問いがあいまいな問いだからであろう。例えば、「これは何ですか」という問いに対して、ある場合には、「それはリンゴです」が答えになりうる。しかし、この問いに対して答える仕方は、無数にある。同一の状況においても、「それは果物です」「それは食べ物です」「それは私のお昼御飯です」「それは私がかかったものです」「それはビタミン補給のものです」などが可能であるかもしれない。そこで、上記のどれかで答えるとする、その時にはその問いを文脈から限定して答えている。例えば、「それは何ですか」を「その果物としての種類は何ですか」という問いだと理解して、「リンゴです」と答える。「それは何ですか」を「それをどうするつもりなのですか」という問いだと理解して「それは私のお昼ごはんです」と答える。「それは何ですか」を「それはどうしてここにあるのですか」という意味だと理解して、「それは私が買ったものです」と答える。もし、このようにして、「これは何ですか」という問いを限定しなければ、どんな答えも提供することができないだろう。そして、「何」の間をこのように限定して答えているのだとすれば、例えば

「これは何ですか」「リンゴです」

の答えは、次のような完全文になるだろう。

「その果物としての種類は、リンゴです。」

これは、主語と述語を换位して、「リンゴが、その果物としての種類です」と言い換えられるので、同一性文である。

このように「何」の問いの限定する方法として、次の二つの方法が考えられる。

(ii) 「何」の問いを限定する方法1: 観点を加えること

「これは何ですか」→「これは、色に関して、何ですか」「この色は何ですか」

「首相のあの発言は何ですか」→「首相のあの発言は、意図に関して、何ですか」

このように観点を付加した「何」疑問は、さらに、「この色は何ですか」とか「首相のあの発言の意図は何ですか」という問いと同義である。しかしこれらは、曖昧な部分を残す問いである。「この色は何ですか」と尋ねられたときに、色について、どの程度細かな色の名前を提供すべきか、あいまいな部分がのこる。「首相の発言の意図は何ですか」と尋ねられたときに、どの程度細かな情報を提供すべきか、あいまいな部分が残る。

前者の場合、さらに限定して「この色の光の周波数はなにですか」とすると、その答えは同一性文になるだろう。後者の場合も、その答えが「首相の発言の意図は、国会終了後に退陣するということです」の場合には、同一性文である。これらが同一性文であることも、主語と述語を换位してみれば確認できる。

(iii) 「何」の問いを限定する方法2: 「何」の問い以外の疑問文にすること

①「何」疑問以外の補足疑問にする場合: 他のタイプの補足疑問の場合には、答えの完全文を同一性文にすることができたので、この場合にも答えの完全文は、同一性文になる。

②決定疑問にする場合: 「これは何ですか」という問いがあいまいだったので、「これは売り物ですか」という問いに言い換えるような場合である。後述するが、これの答えも同一性文になる。

(iv) 予想される反論

次のような反論が予想される。「何」の問いには、指示を求める問いの場合だけでなく、述定を求める問いの場合がある。「何」の問いが、指示を求めるのは、つぎのような場合である。

「何が、この事故の原因ですか」

これの答えは、「この事故の原因＝…」というような同一性文に書き換えることが可能であろう。「何」の問が、述定をもとめる質問になる場合がある。つぎのような場合である。

「その花の色は何ですか」「その花は何色ですか」

「彼の国籍はなにですか」「彼は何人ですか」

われわれは主語述語文から疑問文を作ることができる。そのときに、主語を what に置き換えて作る「何」疑問は、指示を求めており、述語を「何」に置き換えて、語の位置を変えて、作る疑問文は、述定を求めている。後者の場合には、問は指示を求めておらず、答えの完全文は同一性文にならないのではないかと。

(v)反論への応答

最初に確認しておきたいことは、「質問には、必ず指示と述定が含まれる」ということである。例えば、「これは何色ですか」という問いの場合には、問いの観点(色)が明示されており、それはすでに対象についての一定の述定(色を有するもの)であるといえる。つまり、この問においても指示だけがおこなわれているのではなく、述定が行われている。この問いが述定を求めているとしても、より正確には、「これは、〇〇の色をもつ」のように述定の補足を求めている。この述定の補足は、指示(この場合には色の指示)によって行われる。したがって、この問いは「これの色は、何ですか」という問いに言い換えられるが、この問いは指示を求めている。

「これの色は何ですか」の場合には、先ほどの問いの観点が主語の一部になっている。したがって、問の観点がないように見える。しかし、この問いは曖昧であり、これに答えるには、さらに問いの観点を限定する必要がある。色の語彙は有限であるが、しかし多数あり、しかもそれらがあいまいな仕方階層をなしている。例えば、「赤」と呼ばれる色がさらに多くの色に分けられて名前を付けられている。

たとえ「これは何ですか」のように問いの観点が言及されていないときにも、文脈から問いの観点がわかるはずである。なぜなら、もし問の観点がわからなければ、答える者は何を答えたらよいのか全くわからなくなるからであり、問いとして成立しないからである。そして問いの観点が文脈によって陰伏的に示されているのであれば、「これは何色ですか」の場合と同じように、指示を求める問いだといえるだろう。

一般に言って、「SはPである」という主語述語文は、つねに判断の観点を持つ。その観点は通常はPのより上位の概念Gになるだろう。「Sは何か」と言う問いに、「SはPである」と答えるとすれば、その答えは、Pのより上位の概念Gを問の観点として想定している。問いは、「Sは、Gとしては、何か」となり、その答え「SはPである」は、「SのGとしての特徴＝P」という同一性文に書き換えることができるだろう。

(e)疑問詞「どんな」をもつ補足疑問(英語バージョンにはありません。これは日本語特有の疑問詞だからです)

「馬はどんな生物ですか」「有蹄類です」

この返答を完全文にすると次のようになるが、それは同一性文ではない。

「馬は有蹄類です」

もしこの問いが次のように言い換えられるならば、

「馬の生物としての特徴は何ですか」「有蹄類であることです」

これの答えの完全文は、次のような同一性文となる。

「馬の生物としての特徴＝有蹄類」

この返答は、抽象的一般名である。この疑問文の中の「特徴」という語が、抽象的一般名であり、疑問文に用いられている指示表現は、抽象的一般確定記述とも呼ぶべきものである。

次の問答を考えよう。

「ボルトはどんな人ですか」「世界で最も速く走る人です」

この答えの完全文は、同一性文である。

「ボルトは世界で最も速く走る人です」

しかし、答えが「短距離走者です」ならば、その完全文は次の主語述語文になる。

「ボルトは、短距離走者です」

この場合は、「ボルトはどんな人ですか」という質問は、「ボルトの特徴はなにですか」と理解されており、つぎの問答になる。

「ボルトの特徴はなにですか」「短距離走者であることです」

この答えの完全文は、「ボルトの特徴は、短距離走者であることです」となる。これが同一性文「ボルトの特徴＝短距離走者」であることは、主語と述語を换位して、「短距離走者であることが、ボルトの特徴です」と言えることで証明できる。

3、決定疑問に関する証明

次に決定疑問についてのテーゼ、T1b「決定疑問に対する答えは、完全な形式で表現されるならば、常に同一性文ないしその否定に書き換え可能である」が成り立つことを証明しよう。

決定疑問では、ある文Pについて、「Pですか」と問われる。その答えは、「はい、Pです」か「いいえ、Pではありません」となる。元の文Pが同一性文でないならば、返答「はい、Pです」もまた同一性文ではない。しかし、それを同一性文に書き換えることによって、問答によって何が明らかになったのかを、明確にすることができる。まず想起したいのは、すべての言明は焦点を持つということである。焦点とは、言明の中で話し手が注意を向けている箇所である。例えば、「彼女は本を買った」という文の発話の場合、焦点は「彼女」、「本」、あるいは「買った」のいずれかにあるだろう。これを決定疑問発話にした場合も同様に、焦点の位置は、3つの可能性をもつ。焦点の地位を「(他でもなく)」と下線で強調して書くと次のようになる(日本語の場合、「は」と「が」が焦点の位置によって変化する)。

「(他でもなく)彼女が、本を、買ったのですか」

「彼女は、(他でもなく)本を、買ったのですか」

「彼女は、本を、(他でもなく)買ったのですか」

これに対する「はい」の答えの完全文の言明も3通りの焦点を持つ。

「はい、(他でもなく)彼女が、本を、買いました」

「はい、彼女は、(他でもなく)本を、買いました」

「はい、彼女は、本を、(他でもなく)買いました」

これらの「はい」の答えの完全文の言明の焦点の位置を、次のような同一性文に書き換えることによって、明確にできるだろう。

「本を買った人＝彼女」

「彼女が買ったもの＝本」

「彼女が本について行ったこと＝買うこと」

このような同一性文の言明によって、「彼女が本を買ったのですか」「はい、彼女が本を買いました」という問答によって彼らが何を確認したのかが、明確になる。したがって、決定疑問に対する答えもまた、同一性文に書き換えることができる。

否定の返答の場合にはどうなるのだろうか。

「(他でもなく)彼女が、本を、買ったのですか」

これに対する否定の返答の完全文は次のようになる。

「いいえ、彼女が、本を買ったのではありません」

焦点の位置は、「いいえ」および「ありません」になる。これは、次のような同一性文の否定に書き換えることができる。

「本を買った人≠彼女」

他の場合についても、上記の同一性文の否定になるだろう。

我々はこちらで、「SはPですか」を『SはPである』は真ですか」と理解し、それに対する答えを『SはPである』の真理値＝真」という同一性文として理解することが可能であるかもしれない。しかし、我々はこの方針をとらない。なぜなら、「コーヒーを召し上がりますか」に対する答え「はい、コーヒーをいただきます」のような、真理値を持たない答えを扱えなくなるからである。この場合には、答えは「私がいただくもの＝コーヒー」となる。あとで詳しく述べるが、この同一性は記述ではなく、宣言であり、真理値をもたない。

3、残された問題

(1) 問いの答えが否定文になる場合

(a) 補足疑問文の答えが否定文になる場合は、最初から補足疑問文に否定が含まれている場合である。例えば、次のような場合である。

「あなたが行きたくないところは、どこですか」

「私は戦場には行きたくない」

この答えの完全文は否定文であるが、これを同一性発話に書き換えると次のようになる。

「私が行きたくないところ＝戦場」

この場合には、否定文は、同一性の否定になるのではなく、左辺の中に否定詞が組み込まれることになる。

補足疑問文の答えが否定文になる場合は、補足疑問の中に最初から組み込まれている場合であるので、否定は同一性文の二つの名詞句のうち的一方の中に組み込まれることになる。

(b) 決定疑問文の答えが否定文であるのは、肯定の疑問文に「いいえ」と答える場合と、否定の疑問文に答える「はい」(英語なら「いいえ」)と答える場合である。前者については、上記で見たとおりである。ここでは後者を考えよう。

後者には、否定疑問文が、同一性文ないし非同一性文を用いた否定疑問文(「A＝～B?」ないし「A≠B?」)である場合と主語述語文を用いた否定疑問文(「SはPではないのですか?」)である場合がある。

後者、つまり否定疑問文が主語述語文の場合には、それを同一性文の否定疑問文か、非同一性文の否定疑問文かのどちらかに書き換えることができる。たとえば、次のように。

「あなたは昨日日本を買いませんでしたか?」「あなたが昨日買ったもの≠本?」

「このリンゴはまだ食べられませんか?」「このリンゴ＝食べられないもの?」

同一性文ないし非同一性文が否定疑問に用いられる場合は、次のように答えも、同一性文ないし非同一性文となる。

問い「A＝～B?」、答え「A＝～B」

問い「A≠B?」、答え「A≠B」

(2) 問いの答えが全称文になる場合

① 補足疑問の答えが全称文になるのは、次のような場合だと思われる。

例えば「すべてのカラスが黒い」が補足疑問の答えになるのは、次の二つの場合であろう。

ケース1

「どのくらい割合のカラスが、黒いですか」

「すべてのカラスが、黒いです」

この場合には、「黒いカラスの割合＝全部」という同一性発話である。

ケース2

「すべてのカラスは同じ色ですか。」

「すべてのカラスは同じ色です。」

「それでは、すべてのカラスは、何色をしていますか」

「すべてのカラスは黒いです」

この場合には、「すべてのカラスの色＝黒」という同一性発話である。

②決定疑問の答えとなる場合

「すべてのカラスが黒いのですか」「はい、すべてのカラスが黒いのです」

この問答で何が明らかになっているのかを明確にするためには、問と答えを同一性文に書き換える必要がある。上記の分析から明らかのように、「すべてのカラスが黒い」は次のどちらかの意味になるだろうか。「すべて」に焦点があるのなら、「黒いカラスの割合＝全部」の意味である。「黒い」に焦点があるのなら、「すべてのカラスの色＝黒」の意味である。したがって、「すべてのカラスが(は)黒いのですか」の意味は、次のどちらかになるだろう。

「黒いカラスの割合は全部ですか」

「すべてのカラスの色は、黒ですか」

これに対する答え「はい、すべてのカラスが黒いのです」も次の二つの同一性文になるだろう。

「黒いカラスの割合＝全文」

「すべてのカラスの色＝黒」

(3) 問いの答えが連言や選言になる場合

次の例を考えてみよう。

「応募の条件は何ですか?」「PかつQです」

この答えは、答えの省略形である。答えの完全文は、次のようになる。

「応募の条件は、PかつQであることです」

この場合には、これを次の同一性発話に言い換えることができる。

「応募の条件＝〈S1がP1であり、かつS2がP2である〉ということ」

選言についても同様である。つまり、問いの答えの完全文の主結合子が連言や選言になることはないだろう。

(4) 問いの答えが、条件法になる場合

問いの答えが、条件法になる場合に、その条件法文は同一性文に書き換え可能だろうか? 問いの答えが、条件文になるときは、次の二つに分けられる。

(a) 問いが条件文である場合

① 問いの条件法の後件が、補足疑問の場合

次のような条件法の問いを考えよう。答えの場合、条件法の答えの後件が、同一性命題になる。

「もしバターを150度に熱したら、バターはどうなりますか」「バターは溶けます」

この答えを完全文にすると次のようになる。

「もしバターを150度に熱したら、バターは溶けます」

この完全文の後件を次のような同一性文にすることができる。

「もしバターを150度に熱したら、バターの状態＝溶ける、となる」

この全体は、条件法であり、同一性文ではない。しかし、次のようにすれば、全体が同一性文になる。

「バターを150度に熱したときのバターの状態＝溶ける」

② 条件法の後件が、決定疑問の場合

「もしバターを150度に熱したら、バターはとけますか」

これへの肯定の答えの完全文は、次のようになる。

「もしバターを150度に熱したら、バターは溶けます」

これもまた補足疑問場合と同様に、全体を同一性文に書き換えることができるだろう。

「バターを50度に温めたときのバターの状態＝溶ける」

決定疑問の答えが否定になる場合はどうだろうか。

「もしバターを50度に温めても、バターは溶けません」

この完全文は、次のような同一性文の否定だとみることができる。

「バターを50度に温めたときのバターの状態≠溶ける」

(b) 問が条件文ではない場合

問いが条件文でなくても、答えが条件文になることはありうる。

「このリンゴは赤色になりますか」

「もしそのリンゴがこれからもうまく育ったならば、それは赤色になります」

この完全文の後件をつぎのように、同一性文にすることができます。

「もしそのリンゴがこれからもうまく育ったならば、そのリンゴの色＝赤色 となる」

さらに、この完全文の全体は、つぎのような仕方で、同一性文に書き換えることができる。

「そのリンゴの色＝赤色が成立する条件＝そのリンゴがこれからもうまく育つこと」

(5) 問いの答えが、存在文になる場合。

「日本に熊は存在しますか」「はい、日本に熊は存在します」

「ペガサスは存在しますか」「いいえ、ペガサスは存在しません」

これらの答えもまた同一性文に書き換えることができる。

「日本＝熊の生息地の一つ」

「この世界≠ペガサスが存在する世界」

{「神は存在しますか」「いいえ、存在しません」

「この世界＝神が存在する世界」

「時間は実在しますか」「はい、時間は実在します」

「この世界＝時間が実在する世界」 }

5、次にすべきこと

以上が、②「問いに対するすべての答えは、同一性発話ないしその否定に言い換え可能である」の証明である。次にすべきことは、⑥「異なる同一性発話は、(異なる真理条件、主張可能性条件、使用法を持ち)異なる意味を持つ」

の証明である。